

フロアボールカフェ

～ “いつでも、誰でも、気軽にできる” スポーツコミュニティづくり～

一般社団法人 北海道フロアボール普及プロジェクト

(第II期2016年、2017年 第1種助成)

話し手: 梅田弘胤さん(代表理事)



札幌フロアボール体験会にて、右端が梅田さん

北海道オホーツクのまち遠軽町に、北欧生まれのスティックスポーツで交流する「フロアボールカフェ」があります。コンセプトは、町民みんなが会員、カフェのように誰でも気軽に来られるスポーツのひろば。道内へのフロアボール普及を通じて多世代交流スポーツの可能性を発信する、梅田弘胤さんにお話を伺いました。

●活動を始めたきっかけは何ですか？

10年前に地元(遠軽町)に帰ってきたタイミングです。私は整形外科医で、スポーツドクターの資格も取りスポーツ好きなので、スポーツをするライフスタイルにしたいと思っていました。アイスホッケーをかじった経験があり、遠軽でも仲間を集めたいと思ったのですが、道具にお金がかかるし、リンクもないので諦めました。

似たようなスティックスポーツをYouTubeで探したら、子どもも大人も同じようにできるフロアボールを発見してやってみよう。同級生や自分の子どもを誘って個人の活動として始めたのですが、やればやるほど手応えを感じ、北海道内にもっと仲間が欲しくなってきました。

普及にはお金がかかるので、助成金に申し込めるよう一般社団法人を設立しました。まだ任意団体だった時にもシミセイさんの助成を受けたんですが、自分がやろうとしているのは「コミュニティスポーツ」なんだなと、いい言葉なので活動の意義を語る際に大事にしています。ただのサークル活動ではなく、コミュニティで新しい出会いをつくるという公益性があるので、応援してもらえらうと。

日本ではスポーツ少年団、中学校の部活、高校の部活、大人の仲間とスポーツの場が分断され、色々な年齢層が集まり継続的に活動するところがありません。地域の誰もが気軽に参加できるスポーツのあり方として「フロアボールカフェ」を総合型クラブや民間クラブ、様々な団体に紹介しています。

●あまり知られていないスポーツを普及するには苦勞もありそうですね。

こういうスポーツは指導者がいませんし、スティックスポーツは体育館の床が傷みやすいというイメージがあるため、日本の施設環境では嫌われます。だから、フロアボールはこういうところがいいよね、というメリットが伝わらないと認めてもらえません。

うまくいった例では、民間のサッカークラブでフロアボールを導入してくれました。動きや展開が似ていること、サッカーよりも低学年からゲームが成立するチームスポーツという良さが受け入れられたんだと思います。

また、フロアボールは激しいぶつかり合いが無いので、生涯スポーツレベルでは中学生でも大人とそんな色ない技術で戦えます。多世代交流に適したスポーツと言えます。教育委員会と連携して事業を行うことも度々ありますが、年一回の単発事業が多く、これは普及とは言えません。民間のスポーツ組織の方が関心を持ってくれると動きが早いので、優先的にアプローチしています。アイスホッケーやサッカーなどのプロスポーツ組織には、地域活動のコンテンツのひとつとしてどうですか、というアピールをしています。

●今回の助成によって得られた成果は何でしょうか？

北見、札幌、当別では、熱心に取り組んでくれる方がいてうまくいっています。北見ではサッカークラブが通常種目としてフロアボールをやってくれていますし、当別の障がい者スポーツ団体の長は独自にプログラムを実施し、



大きなイベントの開催に向けて動いてくれています。

札幌では、当別の活動を見に来た知的障がい者の団体が定期的にやってくれるようになりました。フロアボールはルールが簡単なので、障がいのある人や小さな子どもでも入りやすいようです。依頼があった幼稚園では、フロアボールで遊ばせてくれています。

多くはこちらから様々な団体のSNSに書き込んでコンタクトを取り、反応のあったところに出向いていきます。一般のスポーツ店では道具を売っていないので、寄附金や助成金から資金を工面して寄贈しています。

1回の体験会で終わらないよう継続的なコミュニティスポーツの場をつくりたいので、キーマンとなる人がいることが大事ですね。一緒に活動していく中で任せられそうなメンバーに機会を与えて、体験会で指導できる人も増やしています。そこで成功体験を得てもらって、つなげていきたいですね。

●今後の展開はどのように考えていますか？

遠軽町でも少子化や過疎化が進んでいますが、そういう状況に合わせたスポーツのあり方があると考えています。世代に関わらず皆が集まれば複数のスポーツもできるので、田舎ならではの持続的なあり方です。

クラブのように会員・非会員の区別はありません。地



体験会 まずは道具の説明から



ボールをキャッチする練習

域の全ての人を対象で、年に1度でもいいし、何度来てもいい。カフェ形式のスポーツという「無形財産」をフロアボールで確立したいのです。遠軽のフロアボールカフェはロールモデルです。サポーター制度により地元企業からの寄付が集まるようになってきましたので、目に見える成果を出すことも意識しなければなりません。

次のステップは、自分が出ていなくても各地域でやってくれる仕組みをつくることです。最近、大会のために遠軽に帰ってきてくれる若い人がいたり、遠軽から札幌に転勤になった人が札幌のカフェに顔を見せてくれたことがあります。嬉しかったです。さらに、遠軽でカフェを経験した若者が、新たな土地でカフェを生み出して欲しいですね。



2018年7月遠軽フロアボールカフェ

<インタビューを終えて>

いずれスポーツは地域で行う時代が来る、と梅田さんは将来を見据えている。遠軽町だけでなく、学校が統合され部活動が成り立たないところが各地に出てきている。何かしなければという危機感はあるが、人口が少なくなったとしても多世代が集まればスポーツは楽しめる、と悲観はしていない。

地域の人たちが気軽に交流できるスポーツとしてフロアボールを普及したい。静かな語り口だが、どんなに参加者が少なくても体験会を開き、日々情報発信している行動の人である。広い道内を北から南、西から東へ、声がかかれれば出かけていく。

「僕はフロアボールにとりつかれちゃったから」と笑いながら、活動を続けていく苦労も語ってくれた。これからもぶれずに、新しい地平を拓いていってほしい。

インタビュー・2019年8月11日(日)

於：札幌中央区民センター

文責：帝京大学沖永総合研究所 谷本都栄]

—団体概要—

一般社団法人北海道フロアボール普及プロジェクト
(北海道紋別郡遠軽町)

遠軽フロアボールカフェ、道内各地の他団体との協働による交流事業およびフロアボール体験会の実施の他、フロアボール交流大会の開催、フロアボール道具の提供などを行っている。

<https://hokkaido-floorball.jimdo.com/>

※写真：2ページ最後は団体提供